

未来予想図

半米山予想図

学院通信 第296号

Dreaming of an
extraordinary education…



〈2024年度入学始業礼 拝 校長式辞より抜粋〉

この4月からいろいろ変わることがあります。まず君たちに伝えたいことは、オーストラリアからジェニファー・フォーリー先生をお迎えしました。

フォーリー先生は英国の学校でも先生をしたり寮の先生をしたりいろいろな経験を持つた先生です。今回、フォーリー先生にはカリキュラム開発という難しいお仕事をお願いしました。日本の教育というのは、今は少しずつ変わりつつありますが、知識を蓄積することを大切にしています。一方で英国の教育はクリエイティブな感覚でどうしてそうなるのかということを問いかける教育だと思います。そしてここ立教では、日本の教育でもなく、また英国の教育でもない、その両者の良いところを融合した教育をしたい。いろいろな知識を持ちながらも常に問いかけをする姿勢、問いかけをして学ぶ姿勢を忘れない教育をしたい。そのためのリーダーシップとしてフォーリー先生をお迎えしました。

一昨年創立50周年を迎えた本校は、新たな50年を見据えたスタートをきり、今年度はカリキュラムコーディネーターのフォーリー氏を迎えて、来年度から施行を目指して立教英國学院独自の教育カリキュラム編成に取り掛かっている。また、来年度完成予定の新男子寮建設予定地の整備も始まり、今年度は本校の新たなステージへの幕開けの年となっている。

一方、コロナ後の国際交流イベントは以前にまして大きく展開を始め、4月からの新入生も含め多くの生徒が充実したプログラムに参加している。

本号でもオックスフォード大学研修を始め、Japanese Eveningや現地校との交流活動、ホームステイやスクールアウティングなどさまざまなイベントに参加した生徒たちの生の声をお届けする。

Contents...

- * Ms Foley挨拶 * Japanese Evening * 高3礼拝スピーチ
- * 体育祭 * Chelsea Flower Show * Stoke Mandeville訪問
- * Half Term活動・Homestay * School Outing
- * Dartford Grammar School国際交流 * Photo Gallery

Dreaming of an extraordinary education...

I joined Rikkyo school, just over a month ago, having been appointed as the UK trained Director of Curriculum Development (and also as Head of English overseeing the Japanese-English and English-Communication departments). In this capacity, I have begun the exciting and challenging process of imagining and leading the development of a new curriculum. This new curriculum will address the enduring challenge of how to cultivate the best possible learning for our students whilst not only meeting the challenging requirements and changing conditions of both the English and Japanese milieu but also of the rapidly changing global context into which our young global citizens will continue their life journeys.

After all, our dream, our vision as educators, and life-long learners, is to prepare our students to launch themselves towards their dreams.

Our role, at Rikkyo School in England, is surely to create and support a community of bilingual and bi-cultural global citizens (teachers as well as students). Here and now, we are in a unique position to do this. At such an extraordinary school, students have the opportunity of becoming fluent in two languages and two cultures, not necessarily to produce exam mastery and text-book 'fluency', but to develop real-life fluency in two languages and cultures.

Director of Curriculum Development Jennifer Foley

This really is a rather extraordinary educational opportunity, but in saying this, it is anything but an easy thing to do.

The current Japanese English and English Communication departments are in a unique position, I believe, ready to be woven together to create a new Rikkyo Bilingual (English and Japanese) and Bicultural Language and Literature course. Building on the existing traditions of the Japanese English department our ambition is to produce world-class outcomes that prepare students for a changing global world.

We will continue to meet the standards required for Japanese curriculum and for Rikkyo University entrance.

However, our new Rikkyo course (hand in hand with the whole school and Boarding Houses) will honour and therefore pay greater attention to real-life English language, literature and resources across various disciplines taught at Rikkyo. It will emphasise native/natural proficiency, functional English competencies and an appreciation of both English and Japanese literature. It will work towards bilingual and bi-cultural fluency; and, it will



reflect the English National Curriculum assessment objectives and outcomes (something it hasn't done to date) providing an exciting, challenging and enriching curriculum.

Just as importantly, we will foster cognitive and metacognitive skills and independent, self-directed learning, all necessary for life-long learning. Such skills include enquiry, creative and critical thinking, collaboration, resilience, problem solving, as well as a values education... By incorporating the best of Japanese and English teaching practices students will gain a wide and deep appreciation of British and Japanese language, culture and values. All of this is in keeping with the School's founding statement which aimed to develop mutual friendship and understanding of our two nations: Japan and Great Britain.



Japanese Evening

Hello

I attended your school community event on 3rd May with some friends and would like to say what a pleasurable and informative time we had.

Your pupils were really attentive, informative, keen and polite. They looked after us very well and are a credit to their parents and your school.

We are looking forward to attending the same event next year and would be interested in being a host family next May.

Please could you pass on my thanks to everyone involved, particularly our personal hosts named below.

Kind regards,

J.S.



今年のJapanese Eveningは、生徒会が知恵を絞って「アテンド係」を新設！これまでにもまして地元の人々との距離が縮まりました。

私は去年までJapanese Eveningで地域交流委員というお客様の前で日本の文化について英語でプレゼンテーションをするという役職をしていました。しかし、今年からその役職がなくなってしまい、私の得意な英語力を他の方法で最大限に活かすにはどうすれば良いかと悩んでいました。そこで、今年から提案された役職が「アテンド係」という係です。この係は2人でペアになり、お客様を学校に英語で案内し、どこににあるかを紹介するというものです。教室から教室に移動するときに雑談をしたりと、お客様と仲を深めながら、即興で英語を話すというのが一番の難関だったと思います。しかしながら、私は現地校に通った経験があつたり、外交的で、交流が好きなので、3グループほどのお客様を案内したのですが、出会ってすぐに仲良くなることができました。笑顔で「英語上手だね」と褒めてくれたり、英語が聞き取れるようにゆっくりと話してくれた方々にはありがたい気持ちでいっぱいでした。

また、ペアの子がとても仲のいい子で、英語も頑張ってたくさん努力をしていて「これどうやって発音するの？」などとよく質問をしてくれました。そんな彼女をみて、私もこれ以上を目指すように頑張ろうと思えるようになりました。仕事をしてる間は、様々な企画を自分たちも体験することができ、有意義な時間を過ごすことができました。英語を使い、国際交流もでき、頑張った一日の最後には友達とカレーを食べ、とても満足した一日となりました。

(高等部2年生 女子)

Good Morning,

Just a brief note to thank you all for your hospitality yesterday.

I enjoyed both the practical involvement and the demonstrations and I would ask that you pass my thanks on to my two guides, Kanato Shiroasaki and Rihito Iwasaki who made me welcome and seamlessly led me through the different parts of the event. I would also like to thank the outgoing and cheerful Nana Kawakatsu for her patience with my attempts at origami, and the young Gota Takaichi for his expert demonstration of “the broom”.

I hope to come again next year.

Kind regards

G.H.

Ohayou Gozaimas.

Thank you for a wonderful evening at your school, … it was very impressive!

Your students were extremely good demonstrating their crafts … And all were well dressed and well mannered … Lovely to talk to .

It bought back fond memories for me … in the late 1980's … my husband commissioned 3 container ships to be built in Nagasaki … I was able to travel with him and visited many places from Hokkaido , Fuji, Osaka , Tokyo and down to Nagasaki .. where I was fortunate enough to launch the final ship in 1990!

My memories of your wonderful country and your cultures … Contrasting to the busy streets of Tokyo are something I will hold dear all my life .

Your open day … Reminded me again of how lucky I was to see so much of Japan .

Arigato

R.P

►Message from local people

High School 3 礼拝スピーチ

今年度より、毎朝の礼拝ではチャプレンだけではなく、先生方や高校3年生も順番にお話をしてくれるようになりました。先輩達の話はこの立教生活を過ごしていく上でとても貴重な体験談ばかりです。



みなさんはコンフォートゾーンという言葉を聞いたことがありますか？コンフォートゾーンとはその人が慣れ親しんでいてストレスや不安を感じずに過ごせる心理的な安全領域のことです。物理的なものも精神的なものもあって、例えば、慣れ親しんだ場所、またはいつも行動をともにしている友達や、毎朝決まった時間に起きることなどがあります。

私は去年の夏にUCLのサマープログラムに参加しました。今年も参加する方がいると思います。そのプログラム中、正直に言って私は居心地が悪かったです。そこでは全員が英語を話すのが当たり前で、授業後には生徒がずっと質問をし続けたり、誰にでも気軽に話しかけて友だちを作っていく参加者たちと、それらを前提としたプログラムの進行で、私が普段身をおいている環境とあまりにもかけ離れていました。つまり、この環境は完全に私のコンフォートゾーンから外れていたので、不安やストレスを抱えていました。きっと皆さんにも同じような経験があると思います。しかし、そんな環境に置かれたことによって成長できたことは確かです。最初こそ不安を抱えていたものの、周りの人からたくさん刺激を受けて自分もそうなれるように努力して、有意義な経験となりました。私はそれまでの自分のコンフォートゾーンを抜け出せたということです。

コンフォートゾーンを抜け出すことの何が大切かというと、何よりも自分を成長させることができるということです。周りからいろんな刺激を受けて自分をもっと高められます。例えば、この学校に入学して学期を過ごすということは、それまでのコンフォートゾーンを抜け出したということだと思います。異国の地で、新しい友達と寮生活するということは、それこそ最初は不安やストレスが大きかったと思いますが、それによって自分が成長できたということが必ずなにかあるはずです。

だから、普段の生活の中でコンフォートゾーンを抜け出すことを意識してみたらどうでしょうか。慣れたからこそ雑になってしまっていることがありますよね？例えばベッドメイクや、集合の時間など、今の状態があなたにとって一番心地よい、ストレスを感じない状態だと思いますが、そこを少し変化させるだけで、最初こそ辛いものの、自己の成長へと繋がります。ぜひこれから意識してみてください。

(高等部3年生 女子)

先輩達からの

Message...

今回は評価の捉え方についてお話をさせていただきたいと思います。

突然ですが皆さん体育祭はどうでしたか？少し、ほんの少しでもいいから何かしら頑張ったという人は手を上げてみてください。ではその中でMVPを取ったり、何らかの形で表彰されたよという人は手をあげてください。頑張った人がこれだけいるのに対して表彰されたのはほんの一部に過ぎません。もちろん努力をして、その上で他人から評価されることは一番素晴らしいことではあります。ですが、他の人に評価してもらえることは著しく優れているほんの一部の事柄なのではないでしょうか。このことを自分に置き換えるとさまざまなことが上がりますが今回僕は委員会活動を例に上げてみます。

僕はこの学校に入学してからずっとスクールショップ委員会という委員会に所属しています。この委員会を新入生の方々に説明すると、購買の代わりとなるスクールショップというものを運営する委員会です。この委員会はとても拘束時間が長く、活動が多い、立教の中でもハードな委員会の一つであり、皆さんや皆さんの保護者の大切なお金を扱うので非常に責任感のある委員会だと自負しています。そして、大変な上、お金を扱っている以上ミスをするとすぐに批判を受けてしまいます。その他にも、皆さんの需要に合わせたり、在庫管理をしたり、挙げたらきりがありません。

このような仕事をしても評価してくれる人はほんの一部で、大半は批判や無理な要望です。こんな状況でも僕は自分の仕事に誇りを持っています。なぜなら自分でできる限り、生徒の皆さんが快適に過ごせるように尽力し、自分の時間を使っているからであり、周りからの評価ではなく自分なりに評価しているからです。つまり、評価基準を徐々に他人ではなく、自分自身に変遷させているということです。自分が満足できる事ができたのなら、周りがどう言おうとそれは称賛に値する。逆もまたかり、他の人が評価してくれるからと言って自分自身が満足できなければまだ成長の余地を残しているということです。そのため評価基準を変えると自分にとって最善な生き方や過ごし方が見つかりやすくなったり、ポジティブに考えられるようになりますとメリットはたくさんあると考えています。先程挙げた例は、委員会として当たり前のことをしているので、評価を必ず受けるべきものではないかもしれません、みなさんはこのようなことを何かしら抱えているのではないでしょうか。努力が実らない。評価されない。褒めてもらえない。いろいろあると思います。

また、このようなことは社会にもあります。宅配便が少し遅れたり、病院などでの待ち時間が長かったりしたとき、人は怒りを覚えます。また立教でも、洗濯や掃除、ウォーターサーバーの補充まで、クリーニングレディースやメンテナンスの方々がやってくれていますが、なかつたら多分日頃の感謝より先に不満がでると人も思います。つまり他人には評価してもらえないことがその影での活躍のおかげで成り立っていることが無数にあります。だからこそ！そういうときこそ！自分自身の努力を振り返り、自分自身で評価したり、自画自賛するべきだと思います。もちろん自分自身の評価基準だけで物事を指し描くのは、通りに合わないとは思います。ですが、行き詰ったときはぜひ、自分自身を高く評価してあげてください。

(高等部3年生 男子)



Sports Day

校長先生が「歴代最高！」と絶賛した選手宣誓で幕開け！

体育祭実行委員長という立場で体育祭の主軸になったことで、いろいろなことを学びました。今回は体育祭の当日の話ではなく、体育祭の前と後を話したいと思います。体育祭というたった1日のために僕たちはたくさんの準備をしてきました。競技内容、チーム決め、当日の流れなど様々なことを2ヶ月かけて考えました。これだけを聞くと大変だと思う人がほとんどだと思います。チームを決める際、色んな人からの否定や、文句。応援合戦の時間などの文句。準備の中でたくさん嫌なことを言わされました。こんなことばかりでは僕もやる気を失っていたかもしれません。しかし、僕の周りには最高の仲間がありました。同じ高3保健体育科の先生方。僕はこのいろんなことを助けてくれる最高の仲間のお陰で最後までやり切ることができました。体育祭当日は、ほんの一瞬で終わりました。個人的にはうまく行ったかなと思っています。体育祭を終えて、僕は絆というものを感じました。競技で見せてくれた学年関係なく一緒に頑張る姿を見てこれが絆だなと思いました。正直、僕だけでは今回の体育祭は出来ていなかったと思います。色々と手助けしてくださった先生方。チームをまとめてくれたり、仕事を手伝ってくれた大キャプ、高3のみんな。もちろん先生や大キャプや高3のみんなにはすごく感謝しています。でも僕が一番感謝しているのはやっぱり高3の実行委員です。僕のわがままを素直に聞いてくれて仕事を最後まで手伝ってくれました。本当に感謝してし、この4人で出来て本当に最高でした。

最後に、体育祭とはなにか。それはただのスポーツ大会ではありません。みんなで力を合わせて何かを達成するために努力する。学年関係なく絆というものを結んでいく。誰かと助け合っていく。誰かと一緒に挑戦していく。誰かを信頼する。みんなを引っ張っていく。全てが絆という一つの文字に繋がるんだなと感じました。僕は最高のメンバーで最高の体育祭がでて本当に良かったです。(高校3年生 体育祭実行委員長)

体育祭実行委員

今年の体育祭は、実行委員長、実行委員、大キャプテン中心に、とても想いのこもったものとなりました。特に、開会式での、大キャプテン4名による選手宣誓は、校長先生が「歴代最高！」と絶賛するほど、正々堂々、美しいものでした。

体育祭

体育祭の大キャプテンを務めることは、とても充実した経験でした。まず、チームの一体感を感じられたことが大きな収穫でした。みんなが協力して演技や応援の準備に取り組み、優勝という目標に向かって戮力協心する姿を見ることができました。その結果、本番では唯一無二のパフォーマンスを披露することができ、みんなで楽しむことができました。また、リーダーシップや組織力を養う貴重な機会でもありました。応援の練習時などチームのメンバーと連携を取りながら、様々な面でリーダーシップを発揮する必要がありました。そこで、チームをまとめる喜びや、難しさ、責任感を感じることができました。最後に、体育祭の大キャプテンを務めることは挑戦的でありながらも非常に楽しく、充実した経験でした。チームワークやリーダーシップ、コミュニケーション能力など、様々なスキルを向上させることができたことは、私にとって大きな成長の機会でした。(高校3年生男子 ピンクチーム大キャプテン)

私が今回ピンクチームの大キャプテンを務めることを決意したのは、昨年の大キャプテンの一人に憧れたからです。私は大キャプテンとしてできるだけ多くの人が楽しめるようなものにするという目標をもちました。応援合戦の練習では、ピンクチームのみんなと協力できました。特に、相方の大キャプテンはすごく頼もしくて、たくさん助け合いました。そして体育祭当日、彼のように一生懸命に、それだけでなく楽しみ、自分の出場種目、応援合戦、他の種目の応援など、全部を頑張ることができました。結果は惜しくも0点差で黄色に敗れてしまいましたが、閉会式のときに、たくさんの生徒が楽しかったかという質問に手を上げていて、すごく嬉しかったです。先生方、スタッフの方、他にもたくさんの生徒に協力していただいて、本当に楽しかったです。大キャプをやってよかったですと心の底から思いました。(高校3年生女子 ピンクチーム大キャプテン)

Team Pink

Sports Day



自分は最後の体育祭を普通の生徒としての立場ではなく、全員をまとめる大キャプとして参加しました。先学期末に大キャプをやることが決まってから休み中も大キャプ同士話し合い、どのようにしたら今までにないような体育祭を作れるか試行錯誤を繰り返していました。実際に体育祭が終わった今、果たして自分たちが新しく行った取り組みや競技などがうまくいったかはわからないが、個人的にやりたいことも実践できたし、優勝もできたので後悔のない結果になってよかったです。人生最後の体育祭を自分たちの個性を存分に発揮できて、この大キャプ4人でしか作れない体育祭を作り上げられたのは一生の思い出になると思います。

まじさいこー！

(高校3年生男子 イエローチーム大キャプテン)

幸せ。これに尽きる体育祭だったと思います。高校最後の体育祭でしたが、年をとっても記憶に残る最高な1日でした。大キャプテンになるにあたって、私も百人弱を率いることが初めての試みで不安や焦燥感に駆られたりなど、上手に立ち回れないことが多くありました。それでも、一週間をかけて、黄色チーム一団となって応援合戦を作り上げるのは非常に楽しかったですし、参加した種目の球技でも大キャプテンとして勝つことはもちろんのこと、楽しむことを前提として闘いました。しかし、最高の体育祭を作り上げたのは他でもなく、敵味方両方のチームが全力で体育祭に参加したことが影響していると思います。仲間からの励ましや応援が私たちの原動力となり、体育祭が一生記憶に残るものとなりました。いつか機会があれば同じような舞台に立ち、最高なものを作りあげたいです。

(高校3年生女子 イエローチーム大キャプテン)



青春

去年に続き、今年も本当に心に残る体育祭となりました。図書館にある本の中に「若さに贈る」という題名の本があるのですが、著者は今取り戻せるなら「青春」、ただそれだけを取り戻したいと著しています。最近本当にぐづぐづ感じることがあるのですが、何気に送っているこの日常がどれだけ貴重なもので価値のあることなのかということに改めて気づきました。毎日忙しくしてその日を乗り切るのに必死ですが、一歩引いて考えてみると、みんな何かに向かっていつも全力で頑張っているんだと思いました。それってとてもエネルギーが漲っていて若さが象徴するものだと思います。今、私たちが送っている毎日はかけがえのない日常の一部です。その中でも、今学期青春を最も感じたのは体育祭でした。準備期間はかなり短いものでしたが、それでも毎日練習をし、良いチームワークを築けたのではないかと思います。去年の体育祭と異なっていたのは今年初めてチームリーダーになり、同学年の女子と頑張ってTシャツ作りをしたことです。初めての経験だったので、どんなデザインにするのか、リボンの色味やワッペンなど考えることが沢山あって、諦めようと思ったことがあります。しかし、それは私だけに関わらず、他の子も諦めの気持ちを持ったりなど、完成のゴールは本当に遠かったです。しかし、最終的にはみんなで力を合わせて頑張ったおかげで無事完成しました。個人的にはその出来栄えにかなり納得しており、みんなで頑張った大切な思い出となりました。また、体育祭当日は楽しく、充実したものとなり、青春を全力で満喫した大切な一日となりました。

(高等部2年生 女子)

Team Yellow かけがえのない日常

Chelsea

5月23日に世界最大のフラワーショーであるChelsea Flower Showを、フラワー・アレンジメント部の活動の一環として訪れました。今までのフラワー・アレンジメント部の活動は学校内だけで行われ、イギリスにいることを活かせていました。そこで、実際にプロの作品を見て、これから自分たちの制作の幅を広げることを目的に今回の外出を計画しました。

Victoria駅から会場であるRoyal hospitalまでの道では、多くのお店でアレンジメントが飾られているなど、街が花で溢れおり、このフラワーショーの規模の大きさを感じました。会場に着くと、想像の何倍も人の数と展示の規模に驚きました。

このショーは、その年のトレンドを決めるとも言われており、ガーデニングやアレンジメントだけでなく、新しく品種改良された花なども多く展示されていました。また、他にもガーデンハウスや置物など、庭に関する様々な展示物もありました。展示されている花の中には普段の活動で使用するものも多くありました。初めて見る品種や色ばかりで、今後の制作に取り入れたいものがたくさん見つかりました。切り花として使用されない花も多く展示されており、それらを私達の普段の制作で使用することは難しいですが、そこから制作の幅を広げるヒントを得ることができたと思います。

今回、特に印象に残った展示物は、私が一番楽しみにしていたアレンジメント部門の作品です。そのアイデアに驚かされるものばかりで、色使いや配置、形、小物の使い方など、どれも興味深いものでした。2学期に高校3年生の部員で地域のフラワーショーへの出展に挑戦しようと考えていますが、このプロのデザイナーたちの作品を生で見た経験を活かし、自分たちの作品を作り上げたいと思います。

フラワーショー



もう一つ、印象に残った展示物は日本人の石原和幸さんの庭園です。その前には人だかりができておらず、なかなか近づくことができませんでした。しかし、その庭園の作品に携わった日本人の方に声をかけていただき、特別に庭園に入らせていただきました。庭園の中にある小さな小屋からの景色も、外からの景色も美しく、日本庭園の美しさを感じました。また、制作に日本の女子高校生も携わっていたことを知り、驚きました。

今回、英国最大のフラワーショーを訪れ、多くのプロの作品を生で見たという経験はとても貴重な経験でした。今回は高校2年生と3年生の部員のみの参加でしたが、今後は他の部員も含め、多くの作品に触れる機会を増やしたいと思います。

Chelsea Flower Show



パラリンピックの 原点

パラスポーツを通じた学びに、本校の核として取り組んでいる、I'm Possible チームでStoke Mandeville HospitalとStadiumを訪問しました。

パラリンピックは、もともとこの病院のリハビリテーションとしてグッドマン博士が導入し、発展させてことが起源とされています。

ロンドンパラリンピックでも選手村等として使われ、今もなおリハビリテーション及び病院施設として地元社会に根付いています。

グッドマン博士に感化され、リハビリテーションを英国から日本へ持ち帰った山下博士は後に、第1回東京五輪でパラリンピック大会を開催するなど大きく貢献されています。

立教I'm Possibleの生徒も、ここ現地での経験や学びを母国・日本に持ち帰り社会に貢献できる人材へと成長していってくれるでしょう。

いよいよ今年の夏はパリパラリンピック開催です。

ストークマンデビルホスピタルとは、みなさんが親しんだパラリンピックの聖地とされているところです。保健や歴史の教科書で誰しもが一度は見たことあるところです。ですが聖地として綺麗に保存されているわけではなく、廃れてしまった廃墟になどにもなってなく、そこは今でもパラリンピックの意思を淡々と受け継いで聖地と呼ぶよりも、パラリンピック精神の最前線の様な場所でした。勿論、ルードヴィッヒ・グットマンを記念したモニュメントやパラリンピックの源流となつた場所の説明などがしっかりとありましたが、それも街の一部となっていてイギリスらしい聖地のあり方がそこにはありました。

僕は今回の病院訪問を通して学んだことが2つあります。

1つ目は単純ですが、パラリンピックに関する起源や始まってからの歴史などです。

知らなかつた事が殆どだったので実りある経験になりました。街全体にロンドンパラリンピックの施設が散らばっていてとても興味を引き出されました。

2つ目は障がいを持った人々に対する意識の変化です。

この意識の変化はI'm possibleチームに参加していく日々変わってきたものですが、今回の訪問を通して改めて以下のことを思いました。

”健常者と障がい者には大きな壁はなく、どんなときでも相手をリスペクトして同じように接し合うべきだ” ということです。

この他にもいろいろためになることがあり、今回の訪問に参加することができて良かったと思います。

”訪問して終わり” ではなく、今回学んだことを自分の周りにいる友達や家族そしてこのチームの目標の一つでもある英國社会への還元も意識しながら今後も活動していきたいと思います。

(高校1年生 男子)

Stoke Mandeville

Oxford

大学研修

ハーフターム期間の一週間を利用して、Oxford研修が行われています。参加している高等部の生徒たちは近隣にホームステイしながら様々な経験をしました。

プログラム前半は、Oxfordの街を散策するだけでなく、Ashmolean museumのルーフトップレストランでafternoon teaを楽しんだり、Cadburyチョコレート工場を訪れたり、余裕のあるスケジュールの中で有意義に過ごし、中日の夜はホストファミリーに日本食を作る！とスーパーで食材を買う生徒たちも見られました。

後半はJesus college, Oxford universityでの研修授業。英語力やコミュニケーション力を高めていく実践的授業にチャレンジです。

Oxford Junior Summer Programme

夏休みの研修プログラムの一つ、7月7日から13日にわたって行われたOxford Junior Summer Programme。このプログラムに参加したのは中学部2年生と3年生の生徒たち11名。オックスフォードでホームステイをしながら、他国から英語を学びに来た同じくらいの年の子どもたちとともに授業を受けたり、さまざまなアクティビティを通じてコミュニケーションを図つたりと、生きた英語を学ぶ充実した一週間となりました。

Chichester Programme

Chichesterでのプログラム4日目は、世界文化遺産のBathを訪れました。古代ローマ時代の雰囲気を残すこの都市で、生徒たちは散策をした後、ローマ浴場跡を見学しました。

今でも46°Cほどの温泉が湧き出る浴場跡で、考古学資料を見物し、オーディオガイドを熱心に聞きました。途中、湧き出る温泉水を飲める場所があり皆で飲んでみたところ、「なんかひどい味がする」と不評でしたが、"ローマ浴場跡で飲泉する"という非常に貴重な体験ができました。

テルマエ・ロマエというローマ時代の浴場が舞台の漫画を読んだことのある生徒は、街中散策で感激していました。また、歴史を学んでいる生徒は考古学資料を特にじっくり見ていました。このように、知識と体験が交差する時、生徒は生き生きとした様子を見せてくれます。



PGL

小中学部のハーフタームプログラムとして、PGLという施設を訪れ、自然の中でさまざまなアクティビティを体験しています。アーチェリーや、ジップワイヤー、ライフル射撃など、普段体験できないようなことに挑戦しています。高いところまで仲間と協力して登ったり、高いところからジャンプをしたり...怖いと思いながら果敢に挑戦しています。去年参加した人たちは、去年よりもできるようになったり、うまくなっていたり、、、自分の成長を感じているようです。自然の中で友達と楽しく経験し、体を動かす楽しさ、友達と協力すること、なんでも挑戦してみること、を体験していってほしいと考えています。

今日はたくさん体と頭を使うアクティビティをしました。クライミングはとても高い場所まで登ったので怖かったけれど、みんなが応援してくれて頂上まで登ることができました。ジップワイヤーやスリルがあって楽しかったです。ハーフタームも半分が過ぎ、ちょっと残念です。残りの時間もみんなと楽しく過ごせたらいいなと思います。夜のクイズゲームが一番楽しかったです！（中学部3年女子）

たくさん体と頭を使うアクティビティ

今日はクライミングとジップワイヤー、そして探検をしました。クライミングでは一番上まで登ることができて嬉しかったです。ジップワイヤーは高い場所からジャンプをする必要があり、すこし緊張しましたが楽しかったです。探検では、目隠しをして森の中を歩きました。靴がよごれてしまったけれど、目が見えない人の気持ちがよくわかりました。（中学部1年男子）

目が見えない人の気持ちがわかりました

ぼくは今日、ロッククライミングに挑戦しました。ロッククライミングは2種類あって、難しい方と簡単な方があり、最初は簡単な方に挑戦しました。2回目は難しい方を選び、登るのがとても難しくて、ハラハラドキドキを楽しみながらがんばりました。前の僕ならこわくて挑戦できなかつたと思うけれど、立教に来てから度胸がついて強くなれた気がします。（小学部5年男子）

ハラハラドキドキを楽しんだ（小学部5年生男子）

お風呂の起源の町

今日はBathに行きました。お風呂の起源の町です。古代ローマの人々とてもすごいと思いました。ブリタニア（古代ローマ）の頃と、中世のヨーロッパを比較すると、古代ローマを生きた人たちの技術が高度で、発達していることがとても気になりました。立教に帰ったら社会科の先生に聞いてみたいと思いました。（中学部2年女子）



ホテルでアフタヌーンティー

Bathでお風呂や温泉の起源について学びました。音声ガイドの説明がわかりやすく、お風呂について少し興味がわきました。その後はホテルでアフタヌーンティーをしました。種類が多く、食べるのが大変でしたが、美味しかったです。夕食後にはDisc Golfをしました。フリスビーが思い通りに飛ばなかつたり、飛距離がのびなかつたりと、難しかったですが楽しかったです。（中学部3年女子）



ホームステイの思い出

今回のハーフタームで私は、立教周辺のホームステイプログラムに参加しました。ホストファミリーの方は1週間の間、私達をたくさんの場所に連れて行ってくださり、多くのことを経験させていただいたのですが、その中でも6日目が特に印象に残っています。

その日、私達はホストファミリーの友人の元を訪れるためにHayling Islandのビーチに行きました。天気予報では雨ということになっていたのですが、ビーチについたときには少し雲がある程度で、とてもきれいな景色を見ることができました。友人の方に会うと、息子さんと娘さんがいて、さらに娘さんのマリンさんは私達と同じ年でした。私は今まで同じ年の現地の子と関わる機会がほとんど無かったので、その日一日を一緒に過ごしてコミュニケーションを取れたことはとても嬉しかったです。

ビーチにはセーリングクラブがあって、その建物の中で昼食をとってビリヤードに挑戦しました。pool tableと言われて最初は何かわからなかつたため、ビリヤードだったことには驚きました。最初はなかなか上手くいかなかつたのですが、やさしく何度もアドバイスをしてもらえて、最後は少しだけ上達できました。その後、外でカイトにも挑戦させてもらいました。操作が難しかったのですが、コツが掴めると楽しむことができました。

その日の夜はいつの間にかマリンさんのお家にお邪魔することになっていて、マリンさんの弟さんとお寿司をつくることになりました。私よりも年下の男の子が、手際よくお寿司を作っていることに驚きました。また、日本のお寿司はどうなのか聞いてもらえたことが嬉しかったです。少し多いと感じていたお寿司はあっという間に無くなって、お寿司が苦手だった子が好きになったと言ってくれたことにもとても嬉しくなりました。

たくさんの英語に囲まれた6日目は、大変でしたが素敵なお会いもあって、とても充実した一日になりました。

(高等部3年女子)

Homestay 2024 Half Term

私は立教生活最後のハーフタームを使ってホームステイに行きました。今回立教周辺ホームステイを選んだ理由を少し話します。イギリスにあるこの学校には、現地の人と国際交流をする機会が転がっています。私は今まで様々な国際交流プログラムに参加してきましたが、正直自分の英語力を大きく伸ばすことができたかと聞かれるとはい、とは言えません。そこで私はやはり自分で英語を話すことができる機会はホームステイしかないと思ったからです。英語力に自信は全く無いし1人で行くのは心細いけれど、仲間と行くことができるならと気楽に考えて参加を決めました。

私の中で特に印象に残っているのは、ホストファミリーの友達の誕生日パーティーに連れて行ってもらったことです。そこには0人ほどいて、全員初対面だったので緊張していましたが、何人もの人が話しかけてくれて、とても賑やかであたたかな雰囲気だったのを覚えています。イギリスでは家に友達を呼んでパーティーすることがよくあるようです。日本ではあまりない文化で、参加できて楽しかったです。

このホームステイでは、英語力の向上だけでなくお互いの文化や経験の話をし合うことができたことが私の中で非常に大きかったです。何をするにも英語を使うので、日常会話でどんなフレーズをよく使うのかを知ることができました。また、ホストファミリーは職業柄世界各国に行ったことがありそれぞれの文化を知っていたので、私が知らないことを沢山教えてもらい視野が広がりました。それに加え、日本文化に対しても非常に理解のある方々で、私が日本について話すといつも楽しそうに聞いてくれたことが嬉しかったです。

学校から離れた町でリラックスしながらも充実した一週間を過ごし、多様な文化を知って、異なる境遇の人々と出会ったことで、立教では学ぶことのできないことを学べました。学生のうちにホームステイを経験することができて良かったと思っているし、これからも英語の学習をもっと頑張りたいと思えるような一週間でした。

(高等部3年女子)





立教ホームステイ・ホストファミリーとのお茶会

今回のハーフタームでは、立教ホームステイに参加しました。

僕は茶道部に所属していることもあり、ホストファミリーには茶道のお点前を披露しようと考えました。

ホームステイ先に持っていたものは、茶道具と和菓子、そしてこれまでの現地校交流で使っていた茶道に関するプレゼン原稿です。プレゼン原稿はそのままホストファミリーにプレゼントしたところ、とっても大喜びしてくれました。

僕のホストファミリーは抹茶を飲んだことがなかったらしく、今回が初めての経験だったそうです。初日に、僕が "the way of tea (Chado)" を紹介するよ、伝えたところ、ホストファミリーのお母さんは「インターネットでは見たことはあるけど、実際には見たことがないし、それを私の家でやってくれるのはものすごく嬉しいなあ。6月1日を楽しみにしているね。」と話してくれました。

今回は、5人のホストファミリーにお茶を振る舞う必要があり、自分なりにも5回のお点前に挑戦しました。抹茶はほとんど三日月の形(表千家の点て方)になっていたし、ある時は三日月にならずにふんわりとした裏千家の抹茶にもなりました。これまで部活では裏千家式の抹茶の点て方を練習していたので、僕がこれまで親しんできた三日月の抹茶を点てることができたときは驚きました。抹茶だけでなく、お茶と一緒にいただ和菓子も、ものすごく美味しかったと言ってくれました。

今回、茶道部の一員として自分のホストファミリーとお茶会を通して交流ができたこと、そしてその日は6月1日であったことからも、この先の1ヶ月間を充実して過ごせるような気持ちになりました。

自分の趣味である茶道を披露することができ、イギリス人のホストファミリーに喜んでもらえたことがとても嬉しかったです。

(高等部1年男子)

School OUTING の裏側で...



5月22日にあったスクールアウティングで、私は実行委員になりました。この実行委員をやりたいと思った理由は、単純に行き先を決めることができるからです。千と千尋の神隠しの舞台を見に行く関係で、私の学年のM3とP(小学部)が一緒の場所に行くことになりました。Pの体力などを考慮して行き先を決めるのはとても難しかったです。バスの乗り降りの場所を考慮するとナショナル・ギャラリーや大英博物館等の案がでました。あまり歩かなくて体力的に楽ですが、「絵画に興味がない人は、すぐ暇になってしまわないか?」と思いクラスメイトに聞きつつ、良い場所を模索しました。Pにもしっかり相談した結果、ロンドンアイに決まりました。

1日のプランは、私達が決めました。昼ご飯の場所や買い物ができる場所は、Japan centerや焼き肉や中華街等の近くに決定し、みんなが楽しんでくれそうなプランを一生懸命考えました。このプランを発表するとき「ロンドンアイなんて乗りたくない」との声がでると思っていましたが、みんな嬉しそうに私達のプランを聞いてくれたので、とってもホットしたのを覚えています。当日も私達は仕事がありました。班ごとの自由行動がある場合、集合場所を決めました。みんながわかりやすいような目印がある場所にして工夫できたと思います。

今回、アウティング実行委員をしてみて、先生達が沢山行き先を考えてくれていることがわかりました。先生方も私達の作ったこの計画をとても褒めて下さいました。みんなが楽しそうに行動している姿がとても嬉しかったです。来学期もこの実行委員を募集する場合は、また立候補してみようと思います。

ダートフォードグラマースクールとの国際交流

先日、イギリスの現地校であるダートフォードグラマースクールと、立教英國学院の国際交流プログラムがありました。僕は、このような違う国で育ち、違う言語で喋る生徒たちとの交流ははじめてでした。しかし、拙いながらもいつも勉強している英語で相手との意思疎通を図ることができ、英語を全く知らなくても、何事も努力することで最終的によい結果を生み出すことができるのだなと実感しました。

又、自分が育った日本の文化を海外の人々と一緒に体験でき、とても楽しかったです。剣道は打ち込みなどの練習をしたり、茶道では茶道の仕方の流れを見たり、ダートフォードの生徒がとても真剣に聞いたりしてくれて、自分としても日本の文化に触れてくれたことが嬉しかったです。

このような国際交流を通じて、その国の価値観や、友好関係の幅を広げるような活動を楽しみにしています。

(中学部3年男子)



私はこの日初めて同年代の英国人男子と交流をして大切なことを学んだと思います。

私はこの交流をする前、自分の英語が通じるか、初対面の人と上手く接せらるかどうかなど不安なことでいっぱいでした。ですが、ダートフォードグラマースクールの生徒達と接するうちにその子達も自分と同じなのだと思います。例えば、理科室で書道を教えたとき、その子は書き順と違う書き方で文字を書いていました。それを見たとき、私は私が初めて英語を書いたときのことを思い出しました。書き方がわからずとても苦労したのを覚えていました。そしてその子も日本語を習っているとはい、当時の私と似たような状況なのではないかと思いました。その時私は国籍や人種が違っても悩むことや、苦労することはあまり変わらないということを学んだと思います。

これからはこの日学んだことを忘れずに違う国の人と仲良く交流できたらいいと思います。

(中学部3年女子)

Dartford Grammar School

1学期 フォトギャラリー





就任教員

Ms. Foley (Director of Curriculum Development)

後藤礼於奈先生(数学) 湯浅元喜先生(社会)

保坂祥生先生(社会) 須賀直輝先生(数学)

Ms. Friel(美術)

退職教員

井上陽子先生

(体育)



～編集後記～

本年からFoley氏をDirector of Curriculum Developmentとして本校に迎え、カリキュラム面でも日英の教育の更なる融合を目指した大改革がスタートする。折しも、生徒会が新しい試みを次々と企画・実行している。毎年恒例のJapanese Eveningもその一つだ。近隣の英国人を招いて日本文化の体験をしていただく10年以上続くイベントだが、今年から生徒達の新しい発想で「アテンド係」が発足した。お客様1組ずつに生徒達がそれについて案内をする。英語を駆使しながらも、コミュニケーションの大切さを多くの生徒達が改めて実感した。本校のこれから50年先の未来予想図の根幹にあるものを垣間見ることができたような気がした。



Information

ご意見・ご感想は[こちら](#)へどうぞ。

►► publicrelations@rikkyo.uk

Rikkyo School
In England

Official Instagram



Rikkyo School
In England

Official
ホームページ

www.rikkyo.co.uk

第296号 2024年7月31日 発行者 立教英國学院
Rikkyo School in England Guildford Road, Rudgwick,
West Sussex RH12 3BE [https://www.rikkyo.co.uk](http://www.rikkyo.co.uk)